

平成27年2月25日

日本リハビリテーション専門学校「第二回学校関係者評価報告

- 1 日時
平成27年2月23日（木）15:00～16:00
- 2 場所
日本リハビリテーション専門学校 第2校舎6階
- 3 出席者
委員：高田、武市、山下、栗原
事務局：陶山、二瓶、工藤、畠山、篠田、鈴木雅、近野、深瀬
- 4 会議内容

開催宣言・本日の予定（工藤）

陶山

本日はお集まりいただき、ありがとうございます。
昨今の教育に関しましては、変化が著しくなっております。当校における教育においても時代にそぐわない部分があるかと思っております。本日は、みなさんのご意見をいただきながら、十分に検討をしていきたいと思っております。

【議題1】学校関係者評価委員会関係 <別紙資料に沿って説明（工藤）>

- ① 学則の一部改正について
- ② 平成26年度日本リハビリテーション専門学校自己評価・学校関係者評価の見直要因のリストアップ概要について
- ③ 学生中退率の状況（平成9年度～25年度、26年度中間報告）について
- ④ 平成27年度教員の学会・研修会等への参加計画について
- ⑤ 平成25年度卒業生アンケート結果について
- ⑥ 新規定整備について

～検討事項～

武市委員：

校長はじめ、みなさんが真摯に取り組まれている印象がある。学則などの規則はわかりやすくすることが大切であり、今回の学則改正はその点も評価できる。

事務局工藤：

自己評価・学校関係者評価の今年度の見直しについては先ほどお伝えした通りである。委員会での検討結果については、できるだけ自己評価及び学校評価に反映させたいと思っている。

旅費規程については、学会参加を奨励していることを踏まえた規定に改定した。当校の退学率についてはいかがか。

高田委員：

大学と比較して同程度か、大学より低いのではないか。大学では、入学するとき

の成績が良くても、入学後勉強に対するモチベーションが低い学生もいる。また、自分のイメージしていたP T O Tとは違うなどとして退学する学生もいる。

事務局工藤：

入学したからには、なるべく全員を卒業させるようにしたい。

高田委員：

大学はトータル8年間で卒業できればよいが、日リハでは規定で留年の年数が決まっているので、退学率が高くなる要因となっているかもしれない。

しかし、無理に卒業させてもP T O Tになれる見込みが低い学生にとっては、早めに別の将来を選択できるチャンスを与えるという意味では良いかもしれない。

武市委員：

卒業生アンケートの結果を見ると、以前より評価がよくなっているようである。

事務局工藤：

卒業生の意見は、非常に大切だと思っている。

事務局陶山：

卒業生の意見は、きちんと文書として残しておくことが大切である。

高田委員：

授業については、主に社会福祉概論・リハビリテーション概論などに対する興味が低いようである。しかし、P T O Tとしての基礎ともなるので、それらの授業に興味を持たせることも大切である。

事務局畠山：

それらの授業は直接実習と連動していないので興味が持てないのかもしれない。本来は基礎となる大切な授業ではあるが、なかなか学生には伝えることが難しい。

高田委員：

今後の地域包括ケアシステムなどを考えても、それらの授業に学生が興味を持って取り組んでもらえるような対策をしていかないといけないのではないか。

武市委員：

先生方の研修参加予定を見ると、自身の技術や知識の向上につながる研修には積極的に参加しているようだが、福祉制度などに関する研修にはあまり参加されていないようである。それらの研修等にも率先して参加し、先生方が勉強することで、授業に役立ててほしい。

事務局工藤：

福祉制度関係などの授業では、学生の興味が低い。しかし社会福祉概論やリハビリテーション概論に関しては、1年生での授業と4年生の授業では、学生の授業に対する姿勢が違うという印象がある。

武市委員：

当施設では実習を受け入れているが、実習に来ている学生にリハビリテーションを目指すきっかけを聞くと、高校時代にけがをして受けたリハビリに感銘を受けた学生が多い。したがって実技には興味があるが、福祉制度などにはあまり関心

を持ってないようである。

事務局畠山：

体験実習などうまく連携をとり、一緒に覚えてもらうことができれば良いと思っている。

栗原委員：

入学した学生に対しては、責任を持って卒業させ一人前のP T O Tの育成を目指してほしいと思う。

卒業生アンケートを見ると、統計学などの授業も関心が低いが、将来的に学会発表や研究を行っていくことを考えると、実技と含めてそれらの授業にも関心を持ってもらう必要があると思う。そのために、学生にも積極的に研修会や学会などに参加させるのはどうか。

事務局工藤：

学会の参加促進なども考慮したカリキュラムを調整していきたい。

高田委員：

実際に卒業生が授業の手伝いなどに来ることはあるのか。

事務局畠山：

立地の良さもあり、卒業生の多くには大変協力してもらっている。

学生が4年生になってやめなければいけないようなケースでは、学生にとっても教員にとっても心苦しい。4年生になる前に何かしてあげないといけないと思っているが、その場合はどうしてもご家族のご協力も必要になってくる。

メンタルが弱い学生が相談しやすい環境作りが必要であると思っている。相談をする際には、成績などとは切り離して考えられるように、教職員とは別に窓口を設置してフォローすることも必要なのかとは思っている。

成績不振者に対してのフォローは、寺子屋や補習授業などを行うことで、以前より手厚く行うことができていると思っている。

高田委員：

カウンセリングなどの相談窓口はあるのか。

事務局工藤：

現状はないが、個別で相談ができるような環境の準備は進めている。

心理学などの外部講師に協力をお願いしても良いかと思っている。現状でも何名かの学生は実際に講師に相談をしているようである。今後も何か力になってもらえるのではないかと。

高田委員：

以前、臨床福祉専門学校でもそのような環境を整え、カウンセリングなどを実施していた。

事務局深瀬：

教員と学生という立場での教育・指導と、相談者としてのカウンセリングとは切り離して考えないといけないと思っている。

事務局陶山：

学生から見て、自分のことをよくわかってきている担任ではないと相談しにくいこともあるのではないか。カウンセラーだけでなく、教員も対応できるような環境を整備する必要はある。

高田委員：

中には話を聞いてほしいだけの学生もいる。話すことでストレスがやわらぐようなケースは担任が対応するほうが良い。ただし、それ以外にもカウンセリングを必要とする人もいるので、窓口を設け対応をしていく必要がある。

事務局畠山：

学生とその家族がコミュニケーションをとれていないと、学校としてのフォローも難しい。

武市委員：

教員が対応するのかカウンセラーが対応するのか、早い段階で学生に流れを示してあげないとスムーズにはいかないのではないか。

事務局近野：

現在は担任が全てのフォローを実施しているが、かなりの負担がかかってしまっているため、負担を分散できるよう、十分に考慮していく必要があると思っている。

工藤委員：

本日は貴重なご意見をありがとうございました。今後も真摯に検討を進めてまいります。